

日本語の分裂文とウナギ文の形成について

陳 訪 澤*

キーワード: 日本語の分裂文, 前方移動による形成, ウナギ文

要 旨

日本語の分裂文の形成について、今まで「後方移動による形成」と「削除による形成」という二つの解釈が提案されているが、いずれも「XはY」構文の二項目分裂文を対象としたもので、日本語特有の「XはYがZ」構文の二項目分裂文について触れていないため、結局、日本語の分裂文形成の解釈にはならない。本稿は二項目分裂文の述部の特徴に注目し、「前方移動による形成」という新しい解釈を提案する。この解釈は日本語の分裂文の形成を統一的に説明できるだけでなく、その他の主題構文の形成にも通用するものである。また、いわゆるウナギ文の形成についても、それは二項目分裂文に変換できる「XはZはY」構文から第一主題の省略によるものという新しい解釈を提案する。

1. はじめに

1-1. 本稿のテーマ

日本語には、「～のは」という名詞節主題を持つ次のような文がたくさんみられる。

(1a) 彼が書いているのは軽妙なユーモア小説だ。(森瑤子『砂の家』)

(1b) 電話が通じたのは十分後である。(吉行淳之介『美少女』)

このような文は「の」による名詞節主題文の一種で、今までの研究の中でずっと「分裂文」と呼ばれてきたため、本稿もこの名称を使って議論を進めていく¹。分裂文はどのようにして形成されたのか。この問題について、今までの研究の中で二つの解釈が提案されているが、いずれも作例に基づいた解釈なので、決定的な問題点を抱えているといわなければならない。本稿は、実際

* CHEN Fangze: 広東外語外貿大学東方語言文化学院副教授

¹ 「の」による名詞節主題文の分類については陳(1994b)を参照のこと。なお、この構文を「疑似分裂文」と呼ぶ学者もいるが(例えば、Muraki 1974; 井上 1978; 野田 1994 など)、本稿ではこの名称を使わない。

のデータに基づいて、分裂文の形成に統一的な解釈を提案することを目的とする。さらに、本稿の解釈は分裂文以外の主題構文の形成にも通用することを論証し、分裂文の形成と関連して、いわゆるウナギ文の形成についても考えてみる。

1-2. 分裂文の種類

議論を展開する前に、まず分裂文にはどのような種類があるのか、筆者が調査したデータに基づいてその分類を行っておきたい。

分裂文は述部の要素が一項目なのか、二項目なのかによって、一項目分裂文と二項目分裂文に二大別することができる。一項目分裂文は述部の要素が主題化以前の構造においてどんな役割に相当するものかによってさらにいくつかに区別され、二項目分裂文も主題化以前の構造によって三つに分けられる²。

一項目分裂文は「XはY」構文である。

A. 格成分分裂文

- (2a) それをきめるのはきみの母親だ。(森瑤子『砂の家』)

キミノ母親ガソレヲキメル

- (2b) 叫び声が出たのは、葉子の口からである。(吉行淳之介『美少女』)

葉子ノ口カラ叫ビ声ガ出タ

B. 非格名詞分裂文

- (3a) 路子が見たのは一回だけ。(阿刀田高『面影橋』)

一回ダケ路子ガソレヲ見タ

- (3b) 警察にとめられたのは二日ぐらいだったわ。(松本清張『山峡の章』)

二日グライ警察ニトメラレタ

C. 副詞分裂文

- (4a) それを思い出したのも、はじめてだったのだ。(夏樹静子『目撃』)

ハジメテソレヲ思イ出シタ

- (4b) これらの差益還元が必要なのはもちろんだ。(1993. 9. 5『北海道新聞』)

モチロンコレヲノ差益還元ガ必要ダ

D. 副詞節分裂文

- (5a) これらの機械が大衆に本格的に普及し始めたのは、二十世紀前半のアメリカにおいてであった。(1993. 12. 5『北海道新聞』)

二十世紀前半ノアメリカニオイテ, コレヲノ機械ガ大衆ニ本格的ニ普及シ始メタ

² 以下の用例において、片仮名の表記はすなわち本稿のいう「主題化以前の構造」に相当するものである。

- (5b) 昌子が強いて堀沢と争わなかったのは、その気がかりがあったからだった。(松本清張『山峡の章』)

ソノ気がかりガアッタカラ, 昌子ガ強イテ堀沢ト争ワナカッタ

E. 形容詞分裂文¹

- (6a) 東京にいるのはめずらしい。(阿刀田高『面影橋』)

メズラシク東京ニイル

- (6b) 靖代のうしろに増本健夫がいるのは明らかだった。(佐野洋『ひとり、そしてそれだけ』)

明ラカニ靖代ノウシロニ増本健夫ガイル

F. ノ格名詞分裂文

- (7) 拳銃が盗まれているのは立川グループの基地だ。(大藪春彦『名のない男』)

立川グループノ基地ノ拳銃ガ盗マレテイル

G. 被修飾名詞分裂文

- (8) 巨人がいいのはどんな点ですか。(1994. 10. 28 NHK スポーツ)

巨人ノドンナ点ガイイ(か)

H. 従属節要素分裂文

- (9) 合格することがまずまちがいないのは花子だ。(渡部 1979)

花子ガ合格スルコトガマズマチガイナイ

二項目分裂文は「XはYがZ」構文である。

I. 「Y+Z+X」構造分裂文

- (10a) 声をかけたのは、男のほうが先である。(吉行淳之介『美少女』)

男ノホウガ先ニ声ヲカケタ

- (10b) 診察したのはウイグル族が十人、漢民族が三十人。(1993. 9. 6『北海道新聞』)

ウイグル族ヲ十人, 漢民族ヲ三十人診察シタ

J. 「ZノY+X」構造分裂文

- (11a) 診察したのはウイグル族が十人、漢民族が三十人。(1993. 9. 6『北海道新聞』)

十人ノウイグル族ト, 三十人ノ漢民族ヲ診察シタ¹

- (11b) どこへ行くのも自転車が便利だ。(1992. 9. 26『読売新聞』)

便利ナ自転車デどこヘモ行く

K. 「YガZデX」構造分裂文

- (12a) 二人が親しくなったのは、一年ほど前安宅が雪江に現在の借家を見つけてやったの

¹ 本稿で「形容詞」というのは、いわゆる「形容動詞」を含む広義の形容詞である。

がきっかけらしい。(夏樹静子『目撃』)

一年ホド前安宅ガ雪江ニ現在ノ借家ヲ見ツケテヤッタノガキッカケデ, 二人ガ親シクナッタ

(12b) 日本の自動車産業がインドネシアに進出したのは賠償が出発点でした。(1995. 1. 2 NHK アジアが見つめた「奇跡の大国」)

賠償ガ出発点デ, 日本ノ自動車産業ガインドネシアニ進出シタ

二項目分裂文の述部の「Y が Z」における助詞「が」は、すべて総記性を表わしている⁴。

2. 分裂文に関する従来の解釈とその問題点

2-1. 従来の二つの解釈

分裂文の形成について、今まで主に生成文法の研究によって二つの解釈が提案されている。一つは「深層構造」から焦点となる要素を取り出して、それを文の最後に置くという解釈である。この解釈によれば、焦点として取り出された要素は文末のほうへ移動して「だ」がつけ加えられ、焦点を取り出した部分は「の」によって名詞化され、最後に「は」が与えられると分裂文が形成される、ということである。この解釈は焦点となる要素を文末のほうへ移動するという点の特徴なので、これを「後方移動による形成」と呼ぶことにしよう。例えば、「それをきめるのはきみの母親だ」という文は次のような文法操作によって形成されたものと考えるのである。

(13a) キミノ母親ガ ソレヲキメル(←の+は)△(←だ)

(13b) それをきめるのはきみの母親だ

この解釈を提案したものには Muraki (1974: 41-59) と井上 (1978: 21-24) があるが、これは英語の疑似分裂文変形に関する Chomsky の標準的と考えられる解釈をそのまま日本語に適用したものである、と井上(1978)では述べている。

もう一つは、焦点を含む部分から前提になっている要素を削除するという解釈である。この解釈によれば、分裂文のもとになる文は前提と焦点の要素をともに述部に持っており、前提とされている要素を削除することによって分裂文が形成される、ということである。この解釈は述部から要素を削除するという点が特徴なので、これを「削除による形成」と呼ぶことにしよう。この解釈では、「それをきめるのはきみの母親だ」という文を、次の(14a)から前提になっている下線部の要素を削除することによって形成されたものと考えるのである。

⁴ 「総記性 (exhaustive listing)」は久野(1973)の用語で、「が」にこの用法があるということは Kuroda (1965) の指摘によるものである。

(14a) ソレキメル(のは)キミノ母親ガソレヲキメル(だ)・→

(14b) それをきめるのはきみの母親だ

この解釈を紹介したものには井上(1978: 99-102)があるが、渡部(1979)でも質問と答えの角度から、分裂文の形成について、これと同じような見解を示している。

2-2. 従来の解釈の問題点

分裂文の形成に関する従来の二つの解釈はいずれも一項目分裂文だけを対象としたものであるが、分裂文の種類をみれば分かるように、日本語には二項目分裂文も存在している。従来の解釈は、日本語特有の二項目分裂文についてほとんど触れていないため、決定的な問題点を抱えているといわなければならない。

まず、「後方移動による形成」の解釈は一項目分裂文については説明できるかもしれないが、二項目分裂文については説明できない。二項目分裂文は次節で詳しく述べるが、二回の文法操作によって形成されたものと考えられるので、例えば「今日初メテ駅カラ歩イテ行ク」という構造に対して、「今日」と「初メテ」を二回にわたって取り出して文末のほうへ置くと、形成されたのは(15c)のような不適格な文である。

(15a) 今日 初メテ駅カラ歩イテ行ク (←の+は) Δ (←だ)

(15b) 初めて 駅から歩いて行くのは今日だ (←の+は) Δ (←だ)

(15c) *駅から歩いて行くのが今日なのは初めてだ

したがって、この解釈は日本語の分裂文形成の解釈として妥当なものとはいえない。

次に、「削除による形成」の解釈も一項目分裂文について提案されたものなので、一項目分裂文について説明できるのはいうまでもない。しかし、二項目分裂文には適用できるであろうか。この解釈では述部から要素を削除するという操作しか行われないので、二項目分裂文の形成についてはおそらく、その二つの要素を削除せずに述部に残すという方法が取られていると考えられよう。例えば、

(16a) 声ヲカケタ(のは)男ノホウガ先ニ声ヲカケタ(だ)・→

声をかけたのは、男のほうが先だ

(16b) 診察シタ(のは)ウイグル族ヲ十人診察シタ(だ)・→

*診察したのはウイグル族を十人だ

述部から前提になっている下線部の要素を削除すると、(16a)は二項目分裂文になるのに対して、(16b)は非文法的な文になっている。二項目分裂文において、述部の「YがZ」における「が」はすべて総記性を表わしているが、(16a)における「男のほうが先だ」を「男ノホウガ先ニ声ヲ

カケタ」からきたものとみれば、その中の「が」は総記性を表わしているとは考えにくい。そうすると、(16a)の文も実は本当の二項目分裂文ではなく、たまたま削除されずに残った要素に「が」のついたものがあっただけということである。したがって、この解釈も二項目分裂文の形成を説明できず、結局、日本語の分裂文形成の解釈にはならない。

3. 新しい提案

3-1. 前方移動による形成

従来の解釈はいずれも二項目分裂文を対象としなかったため、分裂文の形成を完全に説明することができない。本稿はこの二項目分裂文の述部の特徴に注目したい。二項目分裂文において、述部の「YがZ」の中の「が」は総記性を表わしているため、述部は「指定文」と同じ特徴を持っているといえる。「指定文」とは次の(17a)のような文で、表層構文において、(17b)の「倒置指定文」と全く同義である。したがって、「指定文」と「倒置指定文」は相互変換ができると考えられている⁵。

(17a) 私が社長だ。

(17b) 社長は私だ。

二項目分裂文の述部にこのような特徴があるため、「YがZ」を同義の「ZはY」に変換することができる。つまり、二項目分裂文を「XはYがZ」構文から「XはZはY」構文に変換しても、文法的な文であるといえる。

(18a) 声をかけたのは、男のほうが先だ。→

声をかけたのは、先なのは、男のほうだ。

(18b) 診察したのはウイグル族が十人、漢民族が三十人。→

診察したのは、十人は、ウイグル族だ。

(18c) 日本の自動車産業がインドネシアに進出したのは賠償が出発点でした。→

日本の自動車産業がインドネシアに進出したのは、出発点は、賠償だった。

この「XはZはY」構文は「XはYがZ」構文と形態的には異なっているが、表層構文の意味は基本的に同じである。ただ、「XはYがZ」構文には主題を表わす「は」が一つしかないのに対して、「XはZはY」構文には「は」が二つもある。「は」は主題化の標識なので、「は」が二つあるということは主題化操作が二回も行われていることを意味する。「XはZはY」構文は二回の主題化操作によって形成されたものだから、それを一回目の主題化操作後のものに戻す場合、二つの主題「Xは」と「Zは」を一つにした「(Z+X)はY」という構文が最も妥当である

⁵ 「指定文」と「倒置指定文」について、詳しくは西山(1985)、上林(1988)、熊本(1989)、西山(1990)などを参照して頂きたい。

と考えられる⁶。「(Z+X)はY」構文は一項目分裂文に相当するものなので、さらにそれを主題化操作前のものに戻すと、主題化以前の構造に還元される。(18a)を例にすれば次のとおりである。

- (19a) 声をかけたのは、男のほうが先だ。
 (19b) 声をかけたのは、先なのは、男のほうだ。
 (19c) 先に声をかけたのは、男のほうだ。
 (19d) 男ノホウガ先ニ声ヲカケタ

(19)のプロセスを逆に考えると、つまり、主題化以前の構造から一回目の主題化操作によってまず「(Z+X)はY」構文が形成され、次に二回目の主題化操作の後に「XはZはY」構文が形成され、さらに「ZはY」の部分と同義の「YがZ」に変換する操作を行うと、一般にみられる「XはYがZ」構文の二項目分裂文が形成される、ということである。

主題化以前の構造から「XはYがZ」構文の二項目分裂文を形成するまでのこのプロセスは、次のように表わすことができる。

- (20a) Y+Z+X (ZノY+X, YガZデX)
 ↓
 (20b) (Z+X)はY (→一項目分裂文)
 ↓
 (20c) XはZはY
 ↓
 (20d) XはYがZ (→二項目分裂文)

このプロセスにおける主題化操作について、筆者は次のように提案したい。主題化操作は主題として指定された要素(前提となる要素)を所在のブロックから取り出してその前に移動する操作である。主題化操作を受けた標識として、その要素に「は」を付与するが、その要素が名詞でな

⁶ 二つの主題を持つ文(「二項目主題文」、後述参照)はほとんど、二回の主題化操作によって形成されたものと考えられるが、それを一つの主題を持つ文(「一項目主題文」)に還元する場合、それぞれの部分にくる要素によって、「X」と「Y」、「X」と「Z」、「Y」と「Z」のいずれの結合も可能である。しかし、二項目分裂文に変換できる「XはZはY」構文においては、「Xi」は名詞節なので、主題を一つ消去するためには「Z」を「X」の中に入れて「(Z+X)は」にするのがもっとも自然である。「Y」を「X」の中に入れると、不自然な文または非文法的な文を形成するおそれがあるからである。

a 声をかけたのは、先なのは、男のほうだ。

先に声をかけたのは、男のほうだ。

?男のほうが声をかけたのは、先だ。

b 診察したのは、十人は、ウイグル族だ。

十人診察したのは、ウイグル族だ。

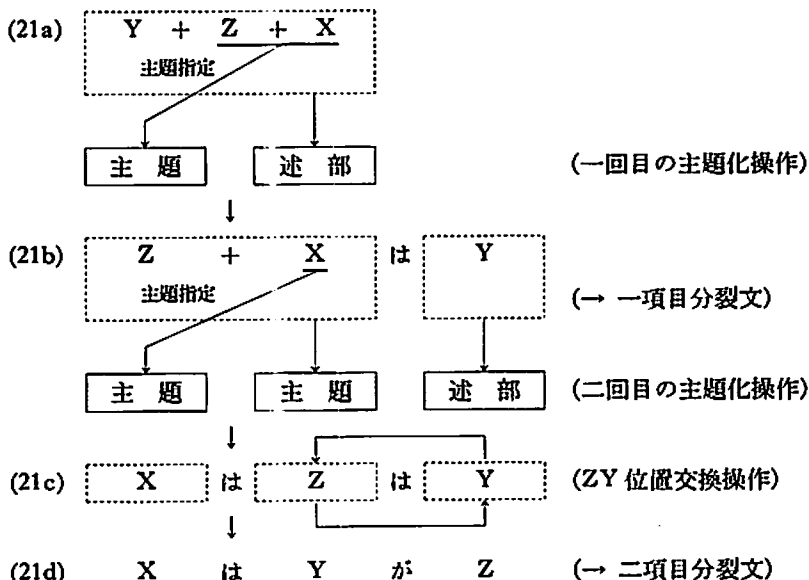
*ウイグル族を診察したのは、十人だ。

c 日本の自動車産業がインドネシアに進出したのは、出発点は、賠償だった。

出発点で、日本の自動車産業がインドネシアに進出したのは、賠償だった。

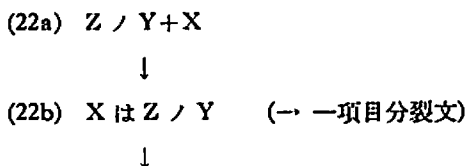
*賠償が、日本の自動車産業がインドネシアに進出したのは、出発点だった。

い場合は「の」によって名詞化する必要がある。操作を受けない要素はそのままの位置に残り、最終的に文末の要素になるものは義務的に「だ」などが付与される。「Y+Z+X」構造を例にすれば、この解釈を次のように図示することができる。



一回目の主題化操作の後に、「Z+X」の部分が主題となり、一つ目の「は」が与えられるが、「X」には用言があるので、「は」と結びつくためには「の」によって名詞化する必要がある。「Y」はもとの位置に残り、この場合、一項目分裂文が形成される。つづけて二回目の主題化を行うと、「X」の部分が所在のブロックから取り出され、その前に移動して別の主題となり、二つ目の「は」が与えられる。そのままでは「X は Z は Y」構文が形成されるが、さらに「Z」と「Y」の位置交換操作を行うと、一般にみられる「X は Y が Z」構文の二項目分裂文が形成される。このように、分裂文の形成に関する操作は主題化する要素を所在のブロックから取り出してその前に移動する操作なので、この解釈を「前方移動による形成」と呼ぶことにする。この解釈では、一項目分裂文の形成についてはもちろんのこと、二項目分裂文の形成についても説明することができる。

「Z / Y+X」構造と「Y が Z デ X」構造も、基本的に「Y+Z+X」構造と同じように考えることができる。ただ、「Z / Y+X」構造について、(20)が示したのと異なる、次のようなプロセスを経由していることも考えられる。



(22c) X は Z は Y

↓

(22d) X は Y が Z (→ 二項目分裂文)

「十人ノウイグル族ヲ診察シタ」という構造から出発すると、次のように二項目分裂文を形成することができる。

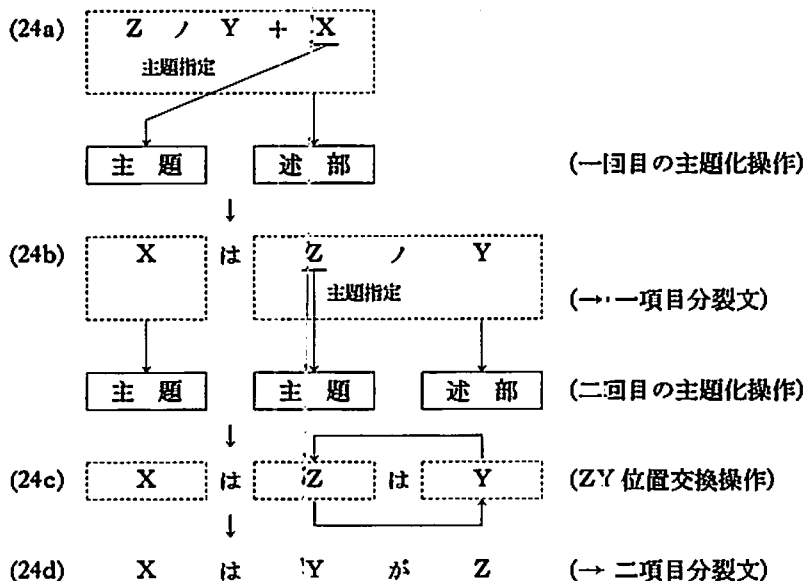
(23) 十人ノウイグル族ヲ診察シタ →

診察したのは、十人のウイグル族だ →

診察したのは、十人は、ウイグル族だ →

診察したのは、ウイグル族が十人だ

(22) と (20) の違いは、二回目の主題化操作は(20)では一回目操作後の主題相当の部分に対して行うが、(22)ではその述部相当の部分に対して行う、ということである。(22)における操作を図で示すと、次のとおりである。



(22)のプロセスは「Z ノ Y + X」構造の二項目分裂文にしか適用されないものであるが、(20)のプロセスでもこれを説明することができるので、分裂文の形成に統一的な解釈があるということとは変わらない。また、(22)の操作もここで提案した「前方移動による形成」の解釈を支持するものである。

二項目分裂文の形成に関する以上の議論から、その表層構文に次のような特徴があることが分かる。つまり、二回の主題化操作が行われた後に述部に残った要素が二項目分裂文における焦点となる要素である、ということである。この要素は「X は Z は Y」構文における「Y」の要素で、同義の「X は Y が Z」構文に変換されても「Y」が焦点であることは変わらない。その証

拠として、もし疑問詞が現われる場合は「Y」にしかこれられないからである。

(25) 剥がすのはどちらが上手だろうな。(吉行淳之介『美少女』)

*剥がすのは上手なのがどちらだろうな。

3-2. 他の主題構文への適用

「前方移動による形成」の解釈は、他の主題構文についても適用できるということを、少し考えておく。

(26a) 象は鼻は長い。

(26b) 鼻は象は長い。

これは二つの名詞主題を持つ二項目主題文である。名詞主題文の形成に関する今までの解釈の中でもっとも有力なものとして、「削除による形成」が挙げられる。野田(1994)では、これを「疑似分裂文」と名詞主題文の形成に関する統一的な操作として提案している。しかし、「削除による形成」の解釈は主に一つの主題を持つ一項目主題文について考えたもので、二項目主題文については触れていない。

二項目主題文において、第一主題は話題を表わし、第二主題は対比を表わすものである。例えば、(26a)において「象は」は第一主題で「鼻は」は第二主題なので、「象は鼻は長い」には、「象は鼻は長いが、首は短い」というような、「鼻」を「象」の他の部分と比較するニュアンスがある。これに対して、(26b)において「鼻は」は第一主題で「象は」は第二主題なので、「鼻は象は長い」には、「鼻についていえば、象は長いが、キリンは短い」というような、「象」を他の動物と比較するニュアンスがある⁷。二項目主題文における二つの主題のこのような区別は、「削除による形成」の解釈ではそれを説明することができない。

このような区別を説明できるのは、本稿で提案した「前方移動による形成」の解釈である。この解釈によれば、二項目主題文も二回の主題化操作によって形成されたもので、(26a)と(26b)の形成にはそれぞれ二通りのプロセスがある。例えば、(26a)の「象は鼻は長い」は次のように形成されると考えるのである。

(27a) 象ノ鼻ガ長イ →

象は鼻が長い →

象は鼻は長い。

(27b) 象ノ鼻ガ長イ →

象の鼻は長い →

⁷ 主題にこの二種類の意味があるというのは久野(1973)の指摘による。久野(1973)では、「は」に「主題」と「対照」の二種類があって、一つの文に「は」が二つ以上現われる場合は最初の「は」だけが「主題」で、残りは「対照」を表わすと指摘している。久野氏の「主題」と「対照」の「は」は、それぞれ本稿の「話題を表わす主題」と「対比を表わす主題」に相当する。

象は鼻は長い。

(27a)において、一回目に「象ノ」が主題化され、二回目に「鼻が」が主題化される。二回目の主題化操作によってできた主題「鼻は」は、一回目操作後の述部相当の「鼻が長い」からのものなので、話題(「象は」)以外の部分から副次的な目的の「対比」のために取り立てられた部分という意味で、第二主題にしかねない。一方、(27b)において、一回目に「象ノ鼻が」が主題化され、二回目に「象の」が主題化される。二回目の主題化操作によってできた主題「象は」は、一回目操作後の主題相当の「象の鼻は」からのものなので、話題の中からさらに中心的な部分を引き出す、いわば話題の中の話題という意味で、第一主題になり、残りの部分は第二主題になるというわけである。

(26b)の「鼻は象は長い」の形成については次のように考えるのである。

(28a) 象ノ鼻が長い →

鼻は象が長い →

鼻は象は長い。

(28b) 象ノ鼻が長い →

象の鼻は長い →

鼻は象は長い。

このプロセスにおいても、第一主題と第二主題の区別を(27)と同じように説明することができる。ここでとくに注意しなければならないのは、二回目の主題化は一回目後の主題相当の部分に対して行うか、それとも述部相当の部分に対して行うかによって、二回目にできた主題の性質が違ってくるということである。主題相当の部分に対して行くと、できた主題は第一主題になるが、述部相当の部分に対して行くと、できた主題は第二主題である。したがって、(27a)の一回目の主題化操作の後の「象は鼻が長い」からは、(26b)の「鼻は象は長い」を形成することができないし、(28a)の一回目の主題化操作後の「鼻は象が長い」からは、(26a)の「象は鼻は長い」を形成することができない。

このように、本稿で提案した「前方移動による形成」の解釈は分裂文だけでなく、名詞主題文にも通用するものであるといえる。

4. いわゆるウナギ文の形成について

ウナギ文とは、次のような文のことである。

(29a) ほくはうなぎだ。(奥津 1978)

(29b) 東京は初めてですか。(陳 1986)

(29c) 源氏物語は紫式部だ。(坂原 1990)

これらの文は、例えば、(29a)はレストランで料理を注文する場合、(29b)は地方出身者に対して質問する場合、(29c)は文学作品の作者について話す場合、自然な表現として使うことができる。つまり、ウナギ文はいつも使う場面、すなわち文脈が必要なのである。

ウナギ文の形成について、今までいろいろの説が提案されているが、大きく分類すると、「述語代用説」、「ノダ説」、「コピュラ説」、「分裂文説」などがある⁸。なかでも、「述語代用説」と「分裂文説」の対立が注目を集めている。ここでは本稿の考え方を踏まえて、分裂文説の立場から新しい提案を試みたいと思う。

従来の分裂文説によれば、(29a)の文は次のように形成されたものであると考えられている。

- (30) ぼく [が食べるの] は うなぎだ →
 ぼく は うなぎだ

つまり、これは「ぼくが食べるのはうなぎだ」という分裂文から「が食べるの」の消去によるものである。奥津(1981)では、消去される部分がきわめてまとまりの悪い要素であるとして、この変形は不自然であると考えている。一方、北原(1981: 292)では、分裂文からウナギ文への形成においていくつかの段階を設定し、このような変形は決して無理なことではないと反論している。

- (31) ぼくが うなぎが 食いたい →
 ぼくが食いたいのは うなぎだ →
 ぼくののは うなぎだ →
 ぼくのは うなぎだ →
 ぼくは うなぎだ

これに対して、奥津(1983)では、この分裂文説は四つの変形が必要であるのに比べて、述語代用説は次のような、ただ一つの変形ですむと、述語代用説の単純さ(simplicity)を主張している。

- (32) ぼくは うなぎを 食べたーい →
 ぼくは うなぎ d-a

述語代用説と分裂文説の対立点はいくつもあるが、ここではいちいち紹介しない。詳しくは奥津(1981)と北原(1981: 283-308)を参照して頂きたい。述語代用説はウナギ文の解釈として、極めて有力な説と考えられるが、それで分裂文説を否定するような力があるとは思えない。上述の変形の単純さも分裂文説を否定する証拠にはもちろんならない。一方、北原(1981)で設定した(31)の形成過程も、ウナギ文の解釈としての妥当性を証明することができるかどうか、疑問がないわけでもない。たとえ証明できるとしても、「ぼくが食いたいのは」から「ぼくのは」へと変わるわけであるから、従属節の述語の代用といえなくもない。そうすると、(31)の操作は広い

⁸ ウナギ文の形成に関する諸説は奥津(1981)に詳しい。

意味での述語代用説とも解釈される。分裂文(つまり一項目分裂文)は「倒置指定文」なので、(31)における各段階の「倒置指定文」を「指定文」に変換すると、その述語代用の性格は一層明確になる。

- (33) うなぎが ぼくが食べたいものだ →
 うなぎが ぼくのものだ →
 うなぎが ぼくのだ →
 うなぎが ぼくだ

以上で分かるように、従来の分裂文説にはやはり問題点があり、その原因はウナギ文を一項目分裂文から変化してきたものとみる考え方にある、と筆者は考えている。この問題点を解決する方法として、ここで、ウナギ文は二項目分裂文から形成されるという新しい分裂文説を提案したい。つまり、ウナギ文の形成において、まず二項目分裂文の形成と同じように、主題化以前の構造から二回の主題化操作を経て「X は Z は Y」構文を形成し、それから第一主題である「X は」を文脈によって省略するとウナギ文が形成される、という提案である。(29)の文を例にすれば、それぞれ次のように形成されたものと考えるのである。

- (34a) ボクガウナギヲ注文スル →
 ぼくが注文するのはうなぎだ →
 注文するのはぼくはうなぎだ →
 ぼくはうなぎだ。
 (34b) 東京ニ初メテ来タ →
 東京に来たのは初めてですか →
 来たのは東京は初めてですか →
 東京は初めてですか。
 (34c) 紫式部ガ源氏物語ヲ書イタ →
 源氏物語を書いたのは紫式部だ →
 書いたのは源氏物語は紫式部だ →
 源氏物語は紫式部だ。

「X は Z は Y」構文を形成するまでのプロセスは、二項目分裂文とウナギ文とは同じであるが、「X は Z は Y」構文から、「Z は Y」を「Y が Z」に変換すると「X は Y が Z」構文の二項目分裂文が形成されるのに対して、第一主題の「X は」を省略するとウナギ文が形成される。

主題を省略することによってイナギ文が形成されるという考え方は、実は坂原(1990)でも提示されている。坂原(1990)では「私が注文したのはうなぎだ」のような文を「同定文」と呼んで、それを(35)のように変換していくと、ウナギ文が形成されると考えている。

(35a) 私が 注文したのは、うなぎだ。→[変域の遊離]

(変域) (役割) (値)

(35b) 私は、注文したのは、うなぎだ。→[役割の省略]

(35c) 私は、うなぎだ。

「変域」も「役割」も省略することができるが、「役割」が省略されるとウナギ文が形成されるという。この操作を文法的に説明すると、つまり(35a)から従属節要素「私が」を主題化して(35b)を形成し、それから「注文したのは」という主題を省略すれば、(35c)のウナギ文が形成されるということである⁹。

主題の省略によってウナギ文が形成されるという点において、坂原(1990)と本稿の立場は共通しているが、第一主題が省略されるという本稿の提案と違って、坂原(1990)では第二主題の省略を提示している。この考え方はウナギ文の解釈として十分可能性があると思われるが、次の二点により、やはり本稿の提案のほうがより説得力があるように思われる。第一に、主題構文において複数の主題がある場合、文頭の主題は話題を表わし、その他の主題は対比を表わすと指摘されている(久野 1973)。話題を表わす主題は文全体の前提なので省略しやすいが、対比を表わす主題は比較の対象を提示するもので、話題の主題に比べて省略しにくい。第二に、実際にも「ぼくはうなぎだ」という時、「ぼくは」は他人と比較する意味があり、例えば「太郎はカツ丼だ。ぼくはうなぎだ。」というように、対比の主題といえる。もし「ぼくはうなぎだ」に省略されたもう一つの主題があるとすれば、それは話題を表わす第一主題で、第二主題とは考えにくい。というのは、第一主題が対比を、第二主題が話題を表わすというような主題構文は自然な表現として考えられないからである。

二項目分裂文からウナギ文が形成されるという提案によって、従来の分裂文説に対して指摘されている難点も、簡単に解決することができると思う。例えば、奥津(1981)では分裂文説の難点を六点にわたって指摘しているが、これに対してすでに北原(1981)で反論している。ただし、北原氏の反論の適当性にはまだ検討する余地があるように思われる。ここでは、筆者が重要だと思う三点を取り上げることにする。

第一に、これは上にも触れたが、消去される部分がまとまりの悪い要素であるという指摘である。この指摘はもう当たらないといってよい。本稿の提案によれば、ウナギ文の形成は「XはZはY」構文の第一主題が省略されるという、極めて自然で当たり前の操作によるものである。

第二に、ウナギ文において「だ」の前になる要素は焦点とは限らないという指摘である。これについても、「XはYがZ」構文の二項目分裂文から主題の「Xは」の省略を考えれば、自然

⁹ (35a)から(35b)への操作は、主題の中の要素をさらに主題化するという、本稿の二回目の主題化操作に相当するものである。この操作によって「私は」は第一主題となり、「注文したのは」は第二主題になるわけである。

に説明される。つまり、「ぼくがうなぎだ」という文は次のように形成されたものであると考えられる。

- (36) ボクガウナギヲ注文スル →
 うなぎを注文するのはぼくだ →
 注文するのはうなぎはぼくだ →
 注文するのはぼくがうなぎだ¹⁰ →
 ぼくがうなぎだ。

「X は Y が Z」構文において、焦点は「Y」の部分にあるので、「X は」が省略されても焦点は変わらない。

第三に、ウナギ文は二項目だけでなく、三項目以上の要素を取ることも可能であるという指摘である。この指摘を説明するポイントは、複数の要素が一項目分裂文の述部の要素になり得るかどうかにある。このような一項目分裂文の形成の可能性については、すでに北原(1981)の反論によって示されていると思うが、実際の用例としても複数の要素による一項目分裂文が存在しているのである。

- (37a) 城田が由美と二人だけで会えたのは、その夜から四日後である。(吉行淳之介『美少女』)

- (37b) ウィグル族の患者が学術的に確認されたのは世界で初めてという。(1993. 9. 6『北海道新聞』)

以上、ウナギ文の形成について、分裂文説の立場から新しい解釈を提案してその説得性を示したが、これは述語代用説を否定するものではないということ、改めて強調しておきたい。述語代用説もウナギ文の形成についてかなり説得性のある解釈である。同じ文法現象に対して複数の角度から研究し、そのメカニズムを明らかにしていくのが、文法研究のあるべき姿であると筆者は考えている。

5. おわりに

以上、本稿では実際のデータに基づいた分裂文の種類を提示し、分裂文の形成について統一的な解釈を提案した。さらに、分裂文との関連からいわゆるウナギ文の形成についても新しい解釈

¹⁰ 北原(1981: 299-300)でも、次のaの文から主題の「注文したのは」を省略すれば、bの文が形成されると述べている。

a 注文したのは ぼくが うなぎだ。
 b ぼくが うなぎだ。

しかし、北原氏はaの文を二項目分裂文としてではなく、二つの要素が一度の操作によって述部の要素になった一項目分裂文として考えているようなので、bの文の「全体が焦点だ」と述べている。

を提案した。主な結論として、次のようにまとめることができる。

- (1) 日本語には一項目分裂文だけでなく、二項目分裂文も存在している。
- (2) 分裂文の形成に関する従来の解釈は一項目分裂文だけを対象としたものなので、日本語特有の二項目分裂文を説明することができない。
- (3) 主題化という文法操作は、主題として指定された要素を所在のブロックから取り出してその前に移動することである。この解釈は分裂文の形成を統一的に説明できるだけでなく、その他の主題構文の形成にも通用するものである。
- (4) ウナギ文は二項目分裂文に変換できる「XはZはY」構文から、第一主題の省略によって形成されたものである、と解釈することができる。

本稿は日本語の分裂文の形成のメカニズムを中心に検討したが、各種の分裂文が成り立つための条件については別の機会に考えたい。

参 考 文 献

- 井上和子(1976)『変形文法と日本語(上・下)』,大修館書店。
 ———(1978)『日本語の文法規則』,大修館書店。
 上林洋二(1988)「指定文と指定文——ハとガの一面」,『筑波大学文芸言語研究言語篇』14号,筑波大学。
 奥津敬一郎(1978)『「ボクハウナギダ」の文法』(1983増補版),くろしお出版。
 ———(1981)「ウナギ文はどこから来たか」,『国語と国文学』58-5,東京大学国語国文学会。
 ———(1983)「ウナギ文はどこから来たか」その後,『「ボクハウナギダ」の文法』(1983増補版),くろしお出版。
 北原保雄(1981)『日本語の世界6・日本語の文法』,中央公論社。
 久野 暉(1973)『日本文法研究』,大修館書店。
 熊本千明(1989)「指定と同定——「…のが…だ」の解釈をめぐって」,『英語学の視点』,九州大学出版会。
 坂原 茂(1990)「役割,ガ・ハ,ウナギ文」,『認知科学の発展』第3巻,講談社。
 陳 訪 滢(1986)「主題在成分関係中的位置」,『科技日語』総8号,中国湖南大学。
 ———(1994a)「「魚は鯛がいい」構文の分析」,『世界の日本語教育』第4号,国際交流基金。
 ———(1994b)「日本語の「の」による名詞節主題文の構造」,『国語国文研究』第97号,北海道大学国語国文学会。
 ———(1996)『日本語名詞節主題文の研究——成分型関係名詞節主題文を中心に』,北海道大学博士(文学)単位論文。
 寺村秀夫(1981)『日本語の文法(下)』,国立国語研究所。
 西山佑司(1985)「指定文,指定文,同定文の区別をめぐって」,『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』第17号,慶応義塾大学。
 ———(1990)「コピュラ文における名詞句の解釈をめぐって」,『文法と意味の間——国広哲弥教授還暦退官記念論文集』,くろしお出版。
 野田尚史(1994)「日本語とスペイン語の主題化」,『言語研究』105号,日本言語学会。
 渡部真一郎(1979)「日本語の分裂文について」,『英語と日本語と——林榮一教授還暦記念論文集』,くろしお出版。

- Kuroda, S.-Y. 1965. *Generative grammatical studies in the Japanese languages*. Reprint.
New York: Garland 1979.
- Muraki, Masatake. 1974. *Presupposition and thematization*. Kaitakusha.
- Nakau, Minoru. 1973. *Sentential complementation in Japanese*. Kaitakusha.